

令和4年度 自己評価

1. 当園の教育目標

- 園での生活を通して、のびのびと遊ぶ楽しさや人と関わる喜びを十分に経験させることで、子どもたちの心を幸福感で満たし、情緒の安定した偏りの無い人格を形成する。
- 他人に受け入れられ認められる経験を通して、自己肯定感と感謝の気持ちを持てるよう導き、生きる力の基盤となる強い心を育む。
- 感情の行き違いや意見の衝突を経験することで、自分以外の人も自分と同様に大切な存在であることに気付くよう導き、他に対する思いやりや労りの心を育む。

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

コロナ禍で園の活動に制限を設けて3年となる。今日では闇雲に怖がるのではなく、ウィズコロナで活発な社会交流を志向する人が増えてきた。しかし実際に保育現場で感染者や濃厚接触者と身近に接し、自分もその当事者となり得るということで、保育者の不安は簡単に払拭できるものではない。保健衛生上の安心を確保しながら徐々に活動の幅を広げて、保育者、保護者共に納得できるように園生活を充実させていくことが、年間を通しての課題である。

- **保育者の不安を軽減し、安心感から明るい思考へと切り替えられるように導く。**
園長自身がコロナへの不安に打ち克ち、率先して過剰に反応しないように努める。
職員に対しても、神経質になり過ぎないように、繰り返し言葉掛けをする。
- **保育者の柔軟な発想を積極的に取り入れ、保育現場に活気を取り戻す。**
個々の保育者の柔軟な発想による保育上の工夫を、管理職が評価し奨励することで他の保育者の更なる意欲を引き出す。
- **保護者との相互理解を図り、友好的な関係性を構築する。**
寄せられる要望などから、保護者の意向を把握し、誠実な対応に努める。
園の教育的配慮や決定に至る経緯を、丁寧に説明することで相互理解を深める。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

1) 職員の不安を軽減する。 B

濃厚接触者の特定及び罹患状況の報告など、保護者へのコロナウイルス関連の情報提供の内容や頻度を抑え、コロナウイルスに対する過敏な反応を避けた。園として鷹揚な対応を心掛け、皆が慣れることで職員の不安軽減を図ったが、性格によって反応に個人差が大きく、依然、神経質に警戒する職員の精神的な負担は完全には取り除けていない。

2) 職員間で新しい発想や工夫を認め合い、保育現場を活性化する。 A

依然として制限の残る保育現場において、個々の保育者が「子どもたちを喜ばせたい」との思

いから、特別感のある保育を工夫して実現しようとする意欲の高まりが見られた。個々の取り組みを園長や主任が認め、職員間に広め奨励することで、保育者同士が触発され、園全体として「楽しいこと」を志向する明るい気風が盛り上がってきた。

3) 保護者との信頼関係の構築 C

電話や手紙、または仲介者を通して把握し得た保護者の意向や要望は誠実に受け止め、できる限り園の教育活動に反映させるよう努めた。同時に園の対応や決定事項については、その経緯や理由を含めて保護者に説明し、理解を求めた。しかしコロナ禍で人間関係が希薄になる中、保育者と保護者の距離感は縮まらず、園の教育活動や保育のねらいについて、保護者の理解、共感を得ることの難しさを痛感した。

4) 特別な配慮を要する園児の適切な受入判断と対応 C

要支援児の対応に苦慮する一年となった。入園前の面談や保護者の主観的な申告から、子どもの発達状況を正確に見極めることは困難である。当該児の特性が、受入可能な程度か否かを適正に判断できず、結果として想定を上回る人数並びに支援の必要程度の要支援児を受け入れることとなり、問題行動に対応が追いつかず、担任に多大な負担を強いることとなった。

5) 加配教諭の適切な配置 A

個別での対応を必要とする園児が想定外に多く、保育を円滑にすすめるためにはフリー教諭の援助が不可欠であった。人手が充分とは言えない人的環境にありながら、担任とフリー教諭が相談して優先順位を決めることで適材適所の加配を実現し、連携して対応することができた。

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果 B

園全体としては徐々にウィズコロナの感覚が根付いて明るく活発な気運が醸成された。保護者、保育者共に、依然個人差は大きいものの、概して、「去年とは違うこと」「楽しいこと」に関心が向いて、保育活動への意欲や期待の高まりとなってあらわれている。一方で、不安感を払拭できない保育者や保護者については、その思いを受け止めつつ個人の意志を尊重しながら緩やかに安堵へと導けるように配慮を続ける必要性を感じている。

コロナ禍において保護者の来園機会を制限して三年。保育者と保護者の親密な関係性が育まれ辛い状況が続いている中、担任への不信感や園の教育活動への不満などが寄せられた。要望については保護者の意向を把握する良い機会と捉え、可能な限り保育に反映させるよう誠実に対応した。また、その際保護者の理解を得るために、園の教育上の配慮や保育の狙いを含めて丁寧な説明に努めた。しかし、人との関わりが希薄になっていると言われる社会情勢下で、孤立感に悩み、悲観的な見解に囚われる保護者が増えている印象もあり、いよいよ共感することの難しさを痛感している。

個別での支援を必要とする園児の数と程度が共に想定を上回り、加えてクラス編成上の偏りも見られたので、順調な学級経営が危ぶまれる状況であった。しかし担任の努力と根気、加配教諭の緊密な連携による適切な援助により、持ち堪えることができた。次年度に向けて、要支援児への適切な対応と、それを実現する加配教諭の充実が急務である。

5. 今後の取り組むべき課題

○ 園児の確保

未就園児クラス（ごっこクラス）の充実と、満3歳児の受入により園児数の確保を図る。

○ 優秀な人材の確保

職員定着に向けて、個人の希望を反映した人員配置を実現する。

特別支援対応、未就園児対応、預かり保育対応など、変動する状況に応じて過不足無くオールマイティに対応できるフリー教諭（パート教諭）の充実。

○ 保護者との信頼関係の強化

保護者が園に対して親近感や信頼感が持てるように、保育者や子どもと共感できる機会を増やす。園の教育活動に関する情報やメッセージを発信して保護者のより深い理解を促す。

○ 要支援児への適切な支援

要支援児の行動特性によって、クラス内で健常児と共に過ごすことが可能か否かを見極め、適切な支援の体制を検討する。（療育機関、保護者との連携等）

6. 学校関係者の評価

- 令和4年度の自己評価の内容、全項目にわたって特に指摘すべき事項はなく、妥当であると認められる。

- 重点的に取り組む目標や計画、評価項目について
コロナ禍の社会情勢をふまえて適切に設定されており、園の取り組み内容がよくわかる。

- 今後の課題、改善に向けた方策について
少子化問題、保育士不足など社会情勢を反映させた今後の園運営のための課題が明確に記載されている。
満3歳児の受入について、募集やクラス編成など、詳細は未確定要素が多い。

- その他
コロナウィルス感染拡大防止の観点から、保育参観を始め学校関係者が実際に来園し、園の教育活動について理解を深める機会が依然制限されたことは残念であった。

特別支援の園児への対応について、クラス毎の保育環境に格差が生じないようにと願う。